元気に活動しています

～ 豊かなむらづくりに取り組む人々 ～

農林水産省
中国四国農政局

農林水産省　中国四国農政局　企画調整室
〒700-8532　岡山市北区下石井1-4-1
TEL 086-224-4511
FAX 086-235-8115
http://www.maff.go.jp/chushi/kyoku/muradukuri/index.html

～　はじめに　～

農山漁村では、国民生活に必要な食料の生産が営まれると同時に、国民共有の財産ともいうべき豊かな自然や伝統・文化が受け継がれてきました。

しかしながら、昨今、過疎化や高齢化、後継者不足等様々な課題が生じ、農山漁村が疲弊していると言われています。一方で各地域には、自分たちの力と知恵で、むらづくりに工夫を凝らしている方々が大勢いらっしゃいます。

農林水産省では、農林水産祭の一部門として「豊かなむらづくり全国表彰事業」を実施し、そのような自主的で個性あるむらづくりをしている方々を表彰しています。中国四国管内では、これまでに200を超える地区の方々が、農林水産大臣賞及び中国四国農政局長賞、更には天皇杯等中央３賞を受賞されています。

今回、天皇杯等を受賞され、長年にわたり力を合わせて活動されている４地区の方々を訪ねてお話をうかがい、むらづくりにかけてきた思いや長年の取組、今後の抱負等についてまとめました。

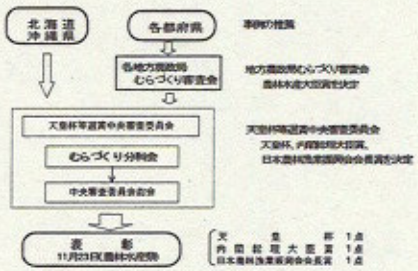
本冊子が、様々な条件下でむらづくりに励む方々に元気を与え、これからの取組の参考になることを期待しています。

平成21年３月
中国四国農政局

豊かなむらづくり全国表彰事業について

「豊かなむらづくり全国表彰事業」は、「農林水産祭」の表彰行事７部門の一つであり、地域ぐるみの連帯感の醸成及びコミュニティ機能の強化を図るとともに、むらづくりの全国的な展開を助長し、農林漁業及び農山漁村の健全な発展に資することを目的として、農林水産省と（財）日本農林漁業振興会の共催により、昭和54年度から実施しています。

農林漁業の振興を核とし、生活、文化等を含む幅広い活動により、豊かな地域社会づくりに取り組んでいる地域の方々を表彰しています。



～　もくじ　～

【Ｓ56年度　内閣総理大臣賞】

砂丘地に活きる ---------- 1
～ 悪条件を克服し、砂丘畑農業を確立 ～
「松神集落」
鳥取県東伯郡北栄町

【Ｓ60年度　天皇杯】

いきいき笑顔　野菜の里　飯田 ---------- 5
～ 元気な体で元気な農業、元気な町 ～
「飯田集落」
島根県益田市飯田町

【Ｈ６年度　日本農林漁業振興会会長賞】

地域の素晴らしさを守る ---------- 9
～ 憩いの公園ー森藤ふれあいランド ～
「森藤村づくり推進協議会」
徳島県吉野川市鴨島町

【Ｈ13年度　天皇杯】

「仁保方式」でむらづくり ---------- 13
～ 自治会で運営ー道の駅「仁保の郷」～
「仁保地域開発協議会」
山口県山口市仁保

表紙写真：岡山県美咲町「大垪和西（おおはがにし）地区」（棚田百選）

砂丘地に活きる

～ 悪条件を克服し、砂丘畑農業を確立 ～

松神集落の方々

鳥取県東伯郡北栄町

「 松神集落 」

自治会長　遠藤　公良　さん

【活動の概要】

北栄町の松神集落は、鳥取県中央部に位置し、北は北条砂丘を経て日本海に面し、南側には肥沃な水田が広がる。水田では水稲と大豆、砂丘畑では特産のらっきょう、葉たばこ、長芋等の生産が行われている。

戦前までは、北に広がる広大な砂丘地は草木も育たぬ不毛の地であり、むらづくりの基盤は、この砂丘地に向けて開発改良を続けてきた住民のたゆまぬ努力により築かれてきた。

篤農家による根気強い努力により、ようやく綿等を作付けした畑が広がったが、保水力の乏しい砂丘畑では、農家あげての荷水によるかん水が行われていた。これは「嫁殺し」と言われたほどの過重労働であった。これを解消し、省力化と生産の安定を図ることが北条砂丘地全体の最大の課題であり、昭和27年、畑地かんがい事業に対して、松神集落は他に先駆けて導入決定に踏み切った。これを皮切りに、ほ場整備、自動かん水化と順次生産基盤を充実させ、長芋、葉たばこ、らっきょう等高収益性の農業を確立していった。

一方水田に関しても、ブロックローテーションによる集団転作の実施、共同での機械導入による共同田植え、刈り取り等、労力削減に努めてきた。

また、砂丘畑の改良を中心とした農業経営の改善とともに、住み良い環境づくりに取り組み、身近な課題は自分たちで、と防犯灯や子どもの遊び場も設置した。

地域の将来の発展方向を見通して、集落全員の合意の下に積極的な農業投資を行い、一致団結したむらづくりで、昭和56年度に内閣総理大臣賞を受賞している。

その後も、畑・水田の基盤整備、耕作放棄地の解消、農地・水・環境保全向上対策、生活面でも大豆加工所やスポーツ広場を設置する等、地域が一体となって取り組み、活力のある集落を目指して活動している。

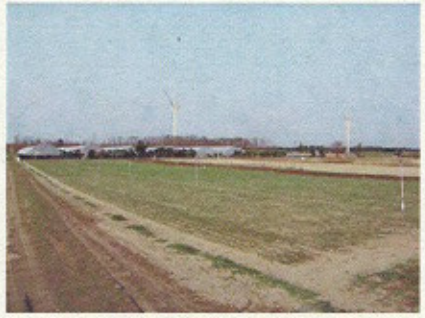
砂丘地を活かしたい

【聞き手】むらづくりのきっかけとなった畑かん事業ですが、かなりの御苦労があったのではないでしょうか。

【松神集落】この集落は、戦前は南側の水田に頼るだけの貧村だったんです。**広大な砂丘地を何とかして農業生産に活用して、農家生活を安定させたい、という一心からずっとやってきました。**

話は戦後すぐの24年から始まっています。何とか「嫁殺し水くみは止めよう」とこの辺りの地区から話が出て、県に働きかけて27年に採択されました。34年には大きな反対も起こりましたが、やっぱりまとめていかないといけない、と最終的にはこの松神集落でやりましょうと決めて、次第に反対した人たちも「ならやるか」となってきたわけです。

その後自動かん水にして規模拡大ができましたが、今度は管の耐用年数がきて至るところで漏水です。負担金の問題もありますし、苦労はありましたが、この時も全地域が更新事業にかかりました。



砂丘畑でのらっきょうの植付け

20～30m下まで、砂地が続きます！

【聞き手】戦後もそうですが、今の更新のお話や水田の区画整理等、平成に入ってからも取り組まれていますね。

【松神集落】畑かんの施設は、修理に毎年200万から300万地元が払わないといけなくなる、これは大変だと、やはりこの下北条地区から更新事業をやりました。

水田の時は、最初この地区は計画対象にも入っていませんでした。前に暗渠排水等の事業をやっていたし、ちょうど同じ時期に畑かんの更新事業もやってました。「田んぼはどうでもいい、畑が重要だ」というこの地区の雰囲気です。でも、今を過ぎると、「将来こんな小さな田んぼでは他から来て作ってくれる人もいなくなる、大区画にして効率よく作業できるようにしておかないと困るのは松神だ」と。畑に力を入れるためにも、まずは田んぼをしっかりしてから、ということでみんなの合意が得られてできたわけです。

砂丘畑特産の長芋

水田での作業

パイプラインまではできませんでしたが、それでも、200区画以上あったのが30区画ぐらいになったので、やって良かったと思っています。

今は水田生産組合で全部の作業を行っています。主に作業するのは12人ぐらいですが、当集落では作業者の年代は40代50代です。他の集落では60代70代が多いと聞いていますから、これはすばらしいと自負しています。

色々苦労はありましたが、それでもできるのは、皆さんの理解があったということだと思います。

地引き網や長芋掘りで都市との交流を

観光地引き網

【聞き手】**松神集落には海もありますね。**
【松神集落】この辺り、漁業は明治時代から各集落地引き網がありましたが、今はほとんど無くなりました。高齢化が進んでできなくなったり、魚も少なくなってきました。漁業のいいところは、漁師だけでなく、集落のみんなも海に出さえすれば新しいものが食べれることです。年に1回集落の集いで「地引き網」やって、捕れた魚で楽しくやってますよ。

観光地引き網もやっています。海岸沿いの国道に大きな看板立ててね。この辺りでは松神しかないと思います。毎年6～7月に多くの人に来てもらっています。

観光長芋掘り

【聞き手】**他にも都市との交流活動はありますか。**
【松神集落】 有限会社で、大きく観光ぶどう園やいちご刈りをやっている人や、個人で観光長芋掘りをやってる人もいます。

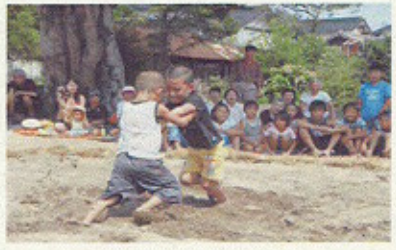
例えば長芋掘りは、17,8年前から、一般の人が自分で掘ってみることが大事だと思ってやっています。来る人も前は20数件ぐらいだったのが、今は100件以上に増えてます。四国や九州、京阪神からも来てくれています。

子どもからお年寄りまで　みんなでコミュニケーション

【聞き手】**「いきいきサロン」というのを開催されているそうですね。**
【松神集落】最初は外に出れないお年寄りを引っ張り出そうとしたんです。平成11年から、80歳以上ぐらいの人を対象に、公民館に集まってもらって、お昼食べてゲームして楽しく過ごしてもらっています。体の不自由な方もおられますが、社会福祉協議会も一緒になって、集落からもボランティアで参加して、年８回やっています。

【聞き手】**他にも皆さんが参加されるものがありますか。**
【松神集落】運動会や、公民館の一大イベントの文化作品展をやっています。運動会は２年に１回ですが、春の１日多くの人が参加して楽しんでます。文化作品展は、各戸にチラシを配って作品を募集します。当日は女性部や松柏クラブ（老人会）による炊き出しもやります。

それから、昔から「七日日相撲」という奉納相撲が行われています。３年前から女の子も入れて、毎年８月７日に青年団の運営でやってます。「いきいきサロン」をこの日に合わせてるので、おばあちゃん達も孫たちの顔をみながら、楽しそうに応援してくれています。



子ども達による七日日相撲

水田・畑・漁場　全てを活かして

【聞き手】**時代時代に応じて、うまく色々な事業を活用されていますが、これはなぜできたのでしょうか。**
【松神集落】**先のことを考えて、いいことだったら先取り先取りで、みんなの合意のもとで、昔からやってきました。**松神では、副会長を４年やった後、会長を４年やるような方針があります。継続する力がすごい力になっていると思います。それから、全てに皆さんの理解がありますから、やってこれてます。

イスの木の定植作業

定植作業は地域のみんなで行いました。

【聞き手】**課題はありますか。**
【松神集落】後継者不足がやはり一番の課題です。

ここの砂丘地の農業はらっきょう・葉たばこ・長芋が主ですが、年間通じた一定の仕事量がありませんから、その当たりも難しいところです。しかし、若い人が進んで就農したいと思うような経営のあり方にしなければ、とも考えています。

【聞き手】**今後の抱負を聞かせて下さい。**
【松神集落】まず水田の方は、今の水田生産組合を24年に法人化する予定で進んでいます。

砂丘畑は、15年から、「耕作放棄地解消プラン」によって、防風樹帯として松にかわる「イスの木」の植樹や緑肥活用による農地の復元を行っています。復元した農地にはらっきょうなどが作付けされて耕作放棄地が解消しています。防風対策も農地の保全も一定の成果は上げていますが、**今後も集落全体の問題として取り組んでいきたい**と思っています。

それから、「農地・水・環境保全向上対策」も、ここでは「松神豊かな郷事業」と呼んでますが、有効に活用して、みんなで地域の環境を守っていくようにしています。

クローバー鋤込による農地の復元

遠藤会長

松神は、田・畑・漁場と３つが揃った、住み良い集落です。

砂丘地という悪条件を住民の弛まぬ努力で改良し続け、砂丘畑農業を確立し、更に水田・漁場という地域の資源を最大限に活かしています。集落の総意により、将来を見通した方向を決定し、時代に合わせた柔軟な活動で、住み良い地域づくりに向けて活動を続けています。

※　「松神集落」へのお問い合わせは、北栄町産業振興課（TEL 0858-36-5565）へご連絡ください。

いきいき笑顔　野菜の里　飯田

～ 元気な体で元気な農業、元気な町 ～

飯田集落の方々

島根県益田市飯田町

「 飯田集落 」

自治会長　城市（じょういち） 基（もとい） さん

【活動の概要】

益田市の飯田集落は、益田市街地から約4kmと近く、２つの河川に囲まれた中洲状の地域である。耕地面積60haの８割弱が畑で、施設面積6.5haに528棟のハウスが立ち並ぶ、メロン・トマトを主体とした県下最大の施設野菜の産地である。

飯田集落は、地形の特質から昔は水害の常襲地帯であった。戦前の桑から戦中の芋や麦、戦後は露地野菜や夏みかんと様々な作物に取り組んできたが、生活は非常に不安定なものであった。貧困の中での過重労働は特に婦人に重くのしかかり、周辺地域から「嫁殺し」と言われるような一小集落であった。

昭和40年頃から、住み良い飯田集落を作ろうとする動きが強まり、自治会を中心に生産・生活両面から将来を展望したむらづくりを行おうと話合いが始まった。集落機能の崩壊寸前までいく困難を伴ったが、話合いによる調整を続け、集落の顔としての「アムスメロン」導入を始めとする野菜の振興、ほ場整備と畑地かんがい事業の実施に至り、近代的野菜産地への基盤が確立されていった。

しかし、生産面が軌道に乗る一方、ハウス病等の健康問題が表面化してきた。そこで、昭和52年度より、モデル事業を導入し健康管理活動を行った。事業終了後も自主的組織「飯田地区健康モデル協議会」を発足させ、著しい成果をあげ、「病気を出さない集落」へと歩んでいった。

また、むらづくりには農家・非農家の別なく交流することが大切と考えた若者達が中心になり、後継者組織「ぽんぽら会」を結成した。地区の運動会や盆踊り、奉仕活動等、地域全体の活性化と融和に大きな役割を果たした。更には、集落の核として八幡宮を新築し、地域住民の融和と一体感を深めた。

「飯田は農業を中心に生きていく」という信念のもと、話合いを中心にした地域が一丸となったむらづくりで、昭和60年度に天皇杯を受賞している。

現在も世代が入れ替わりながら活動を継続し、メロンを始めとした施設野菜の産地として頑張っている。

アムスメロンを飯田の顔に

【聞き手】「アムスメロン」は、どのようにして「飯田の顔」になっていったのでしょうか。

【飯田集落】この集落は、昔から時代の波に流されてきました。戦前は一面の桑畑、戦中は芋やカボチャ、戦後は換金作物をと野菜や夏みかんなど、何でもやってきました。でも夏みかんもだめになって、何か地域産業を作っていかないといけない、ということで色々考えて、その中から、益田から外に出せるもの、ということでメロンが候補になりました。農家・ＪＡ・市や県も一緒になって各地に調査に行って、その結果、**「アムス系メロン」それも立体栽培で、よそにないものを作っていこう**と決まりました。

そして**新しい分野だから、農家が別々にやっていたのではだめだ、集落全体が結集すべきだとの意識に変わっていき、**品種や作型の統一、技術の改善などに取り組んで、共販体制を確立することができました。

今は、アムスメロンを主体に、労力配分とかも考えて、アールスメロン、トマト、葉物野菜などを栽培してます。

飯田の顔　「アムスメロン」

飯田地区のハウス団地

【聞き手】産地を維持していくために工夫されてきたことはありますか。

【飯田集落】問題なのが連作障害で、そのため土づくりにはこだわってきました。かなり検討して、微生物を主体にした有機質主体のメロン専用肥料を何年もかけて苦労して作って、それを栽培農家に強制的に配付して使ってもらいました。今もそうですし、たい肥も入れて、土づくりして、減農薬、減化学肥料でやってます。

平成３年の台風でハウスが倒壊した翌日には、既に飯田地区の皆さんは後片付けをしていた、という普及員さんもびっくりな、地区の皆さんの前向きさです！

地元農産物の魅力を消費者にＰＲ

葉付き大根の栽培

【聞き手】新しい取組はありますか。

【飯田集落】新鮮で安心・安全な地元産の農産物の魅力を地元消費者にＰＲしようと、益田・鹿足地域で平成13年に「地産地消ネット西いわみ」が設立しました。これは市場、生産者、卸・小売り、ＪＡが一緒になって作ったものですが、飯田集落の農家もこの組合員に入っています。月１回の情報誌発行や年１回のフェア開催、学校給食への食材供給や食育活動など、色々と頑張ってやってます。

それから、益田の青果出荷組合で量販店に地場野菜のコーナーを出していますが、そこは顔写真付きで出しています。やはり、安全・安心・